大日本耳鼻咽喉科會會報 第三十四卷 第十一號 昭和四年二月

原 著

會厭軟骨ニ發生セル顫毛圓柱上皮囊腫ニ就テ

附、會厭軟骨舌面ニ瀦溜囊腫ノ最モ頻發スル理由ニ就テ

T. Mitsuyoshi: Über die mit flimmernden Zylinderepithel bekleidete Zyste an der Epiglottis und den Grund des häufigen Vorkommens der Retentionszysten an der lingualen Fläche der Epiglottis.

東京帝國大學醫學部耳鼻咽喉科教室（主任増田教授）

光 吉 多 喜 男

緒 言

本例ハ昭和三年四月東京地方會第八十四回例會ノ席上ニ於テ、會厭軟骨囊腫ニ就テノ演題ノ下ニ報告セルモノナリ。

喉頭ニ發生セル囊腫ニ就テハ古來夥多ノ記載報告アリ、尙其ノ組織學的所見ノ詳細記載セラレタルモノ少カラズト雖モ、其ノ大多數ハ囊腫ノ腔壁扁平上皮或ハ多層扁平上皮等ニテ被ハレタルモノニシテ、顫毛圓柱上皮ヲ有スル顫毛圓柱上皮囊腫ハ比較的少ナク、余ノ文献上集メ得タルハ舌甲狀腺管ノ殘胎ヨリ發生セル所謂舌根囊腫ヲ除キテ、僅カニ Louys, Glas, Salmon, Schneider, Senator, Borst 等ノ報告ナル數例ニ過ギザリキ。

余ハ昭和二年九月偶々外來ヲ訪レタル一患者ノ會厭軟骨舌面ニ發生セル囊腫ノ組織學的檢索ノ結果、顫毛圓柱上皮囊腫ニシテ、且ツ今迄ノ例ト聊カ異ナリタル所見ヲ得タルヲ以テ茲ニ之ヲ報告シ、併セテ會厭軟骨舌面ニ瀦溜囊腫ノ最モ頻發スル理由ニ就キ一卑見ヲ述べ、大方ノ叱正ヲ乞ハント欲ス。

自 驗 例

田沼某、四十八歳、女、待合業。

家族歴 遺傳史ニ特記スベキ事ナク、結核、痼、精神病等ノ遺傳ヲ認メズ。

既往歴 患者ハ幼少ヨリ健康ニシテ特ニ注意スベキ疾患ナシ。初發月經ハ十六歳ニシテ今尙規則正シク存ス。患者ハ待合業ナル故ニ若年ヨリ多量ノ飲酒ヲナシ、現今ニテモ對酌五合、喫煙モ相當ナリト云フ。大正十五年ノ暮右外聽道ヨリ丹毒起リ、頭部ノ大部分迄擴ガリシモ約二十日ニシテ治癒セリ。花柳病ヲ否定ス。

現病歴 約二週間前ヨリ右側ノ耳痛、一二日選レテ左側ノ耳痛起リ、其ノ頃ヨリ咽頭ニ多少ノ異物感アリ、癢痒ヲ感ジ、茶、湯等ノ液體ヲ攝取スル時ハ輕度ノ支障ヲ訴ヘ、睡眠時右側臥スレバ異物感ハ多少増加スト云フ。耳痛及ビ咽頭ノ異物感ヲ主訴トシテ外來ヲ訪フ。輕度ノ咳嗽アルモ喀痰ナシ。

全身所見 體格中等大ニシテ榮養可良、肺ノ右後下部ニ少量ノ乾性囉音ヲ聽クノミニシテ、他ノ肺部、心臟、腹部ノ諸臟器ニ著變ヲ認メズ。局所々々見 耳。兩側共ニ外聽道瘤ニシテ、右側ハ最早治癒ニ赴ケルモ左側ノ瘤ハ其ノ頂點自潰シテ膿汁ヲ分泌ス。左右共ニ鼓膜蓋ニ聽力正常ナリ。

咽頭 咽頭粘膜ハ稍々乾燥シ少數ノ血管充血ヲ見、慢性咽頭「カタル」ノ狀ヲ呈ス。舌壓子ヲ以テ舌面ヲ強ク壓スルニ舌根部ノ左ニ寄レル側ニ約櫻桃大ノ青味ヲ帶ベル灰白色、半透明、球形、「ポリープ」様ノ腫瘍ヲ發見セリ。喉頭鏡ヲ使用スルニ腫瘍ノ全景ヨク觀察セラレ、其ノ腫瘍ハ全ク球形ニシテ表面滑澤、帶青灰白色ノ色彩ヲ有シ、半透明ニシテ液體ヲ容レタル「ゴム」囊ヲ見ルガ如ク、其ノ表面ヲ數本ノ努張セル血管ノ分枝走行スルヲ認ム。消息子ヲ以テ檢スルニ緊張性、多少可動ニシテ短キ柄ヲ有セルモノノ如ク、左側舌會厭窩ヨリ發生スルヲ知ル。周圍ノ粘膜ハ淡紅色ニシテ特ニ強キ炎症性症狀ヲ見ズ。喉頭内ハ變化ナク、聲帶ノ運動正常ニシテ發音明瞭、強勢ナリ。

診斷 兩側外聽道瘤並ニ會厭軟骨嚢腫。

治療 瘤ニ對シテハ「ラノリン」ノ壓迫綿栓ヲ行ヒ、會厭軟骨嚢腫ハ其ノ摘出術ヲ施ス。

手術所見 術式ハ普通ノ坐位ニテ、一〇%「コカイン」及ビ五千倍「アドレナリン」溶液ノ局所塗布麻醉ヲ施シ、冷歸係ニテ絞斷セントスルニ嚢腫ハ破損シ、其ノ内容液ヲ流出シテ萎縮シ、少シク牽引スルニ容易ニ摘出スルヲ得タリ。其ノ嚢腫ノ柄ノ附着部即チ左側舌會厭窩ノ中央部ノ粘膜ハ摘出ト共ニ剝離シテ、豌豆大、腎臟形ノ白色軟骨膜ヲ露出ス。

術後出血ハ少量ニシテ直ニ止血シ、其後硼酸水ノ含嗽、及ビ「アドレナリン」鹽化亞鉛溶液ノ塗布ヲ行ヒシニ約二週間ニシテ手術創面ハ完全ニ治癒セリ。咽頭ノ痒感及ビ異物感全ク消失ス。

囊腫所見

肉眼の所見。摘出セル囊腫ハ内容ノ流出ニヨリ萎縮セルモ、原形ニ膨大セシムルニ約一握ノ徑ヲ有スル薄壁、半透明、球形ノ囊ニシテ、短キ比較の廣キ柄ヲ有ス。流出セル内容ハ黃褐色、粘稠、透明ナル粘液様ノ液體ナリキ。其ノ内容液ハ全部流失セル故ニ其ニ對シテ化學的検査ヲ行フ事ヲ得ザリシハ遺憾ナリ。

組織學的検査。取出シタル囊腫ハ直ニ一〇%「フォルマリン」溶液ニ投ジテ固定シ、水洗後型ノ如ク順次濃厚ナル「アルコホル」ニ移シテ脫水ヲ行ヒ、「チェロイデン」包埋ヲ施シテ切片ヲ作レリ。切片ノ染色ハ「ヘマトキシリン・エオジン」染色、竝ニワンギンソン氏法ヲ以テセリ。

所見。囊腫ヲ弱擴大ニテ鏡檢スルニ一見直ニ球壁ヲ形成スル天蓋部ト囊腫ノ柄ニ相當スル底部ノ二部ニ區別スルヲ得。

天蓋部ノ壁ハ略々一樣ノ厚サニシテ薄ク、約一・〇—一・五耗（血球算定用「オブエクトグラス」ニテ測定）ヲ算シ、明カニ内、外、中ノ三層ヲ識別シ得レドモ、底部ハ厚クシテ外層ヲ缺キ組織ノ切斷セラレタル像ヲ示ス。

外層ハ一般咽頭粘膜ヲ被覆スル多層扁平上皮即チ磚狀上皮ニシテ表面角化セズ、乳頭ハ弱ク發育セリ。

内層ハ腔ノ内壁ヲ被フ鰓毛圓柱上皮ニシテ、其ノ大部分ハ一一二列ノ核層ヲ有スルモ、天蓋部ノ處々ニ甚ダ多層（五—一〇列）ニ發育スル鰓毛圓柱上皮層ヲ見ル。上皮間中ニ粘液細胞ハ發見スル能ハズ。

天蓋部ニ於テハ内面比較的滑澤ナルモ、其ノ底部ニ移行スルヤ甚シク不規則トナリ瘤狀或ハ半島狀ニ腔中ニ突出シ、或ル一部ニ於テハ恰モ腸絨毛ヲ見ルガ如キ感アラシム。諸處ニ體子狀細胞或ハ甚ダ多層ナルガ如ク見ユルモ、其ハ圓柱上皮ノ斜斷或ハ橫斷セラレタルモノナル可シ。此ノ底部ノ上皮モ亦一一二列ノ圓柱上皮ナレドモ、其ノ鰓毛ハ瘤狀或ハ絨毛様ニ突出セル先端ニテハ認め難ク、谷ニ相當スル部ニテ明カニ鰓毛ヲ認ム。

中間層ハ鬆粗ナル結締組織ニシテ、結締組織維ハ表層ニ竝行シテ走り、核ハ濃染シテ處々ニ群ヲナス。其ノ間赤血球ニ充テタル血管ヲ有シ、附近ニ少數ノ圓形細胞ノ現出ヲ認ム。其ノ他結締組織中ニ淋巴濾胞、腺、軟骨、骨等ノ異常組織ヲ發見セズ。腔内ハ全ク空虚ニシテ唯嚢入部ノ先端ニ「エオジン」ニテ淡紅染セル無定形ノ硝子様物質ヲ認ムルノミ。

文献並ニ考按

本例ハ組織學的標本ヲ見ルニ顫毛圓柱上皮囊腫ニシテ、古來文獻ニ報告セラレタル數多ノ喉頭囊腫中特ニ本例ノ如ク顫毛圓柱上皮ニテ被ハレタル囊腫ヲ探索セルニ、舌根囊腫ヲ除キテ Louns, Glas, Salmon, Schneider, Senator, Borst 等ノ報告セル五例ヲ得タリ。

今其等ヲ略記センニ、Louns ハ四十九歳ノ女ニテ右假聲帶ヨリモルガニー氏竇附近ニ及ビ、檢鏡標本ニテハ内面ハ三—四層ノ核列ヲ有スル顫毛圓柱上皮ニシテ、壁中處々ニ淋巴濾胞ニ似タル淋巴細胞群及ビ「ルーベ」ニテ見得ベキ程ノ軟骨島嶼アル囊腫ヲ報告セリ。Glas ハ十二歳ノ女ニテ左側舌會厭窩ヨリ發生セル豌豆大ノ「アテローム」様囊腫ヲ報告シ、内面ハ一〇—一五列ノ多層扁平上皮ニシテ其ノ間處々ニ顫毛圓柱上皮ヲ見テ、呼吸器系粘膜ト消化器系粘膜トノ交叉ヲ示ス興味深キ例ト云ヘリ。Salmon 及 Schneider ノ共同報告セル例ハ喉頭囊腫ノタメニ窒息死セル二十八日ノ初生兒ニテ、組織標本ハ顫毛圓柱上皮囊腫ニシテモルガニー氏竇ノ絞斷閉塞シテ生ゼルモノナラント云ヘリ。Senator ハ六十歳ノ男ニテ會厭軟骨舌根部附近ヨリ生長セル李大ノ囊腫ヲ記載シ、其ノ組織學的所見ハ壁ノ一部ノ肥厚セル部ハ顫毛上皮ニテ被ハレ、壁中ニハ軟骨、多數ノ粘液腺、淋巴濾胞、血管アリ、顫毛上皮ハ移行上皮ヲ介シテ多層扁平上皮ニ移行スルヲ見タリ。Borst ハ其ノ腫瘍ニ關スル著書中腔腸内液性囊腫ノ頂下ニ腮溝ノ殘胎ヨリ生ズル顫毛上皮ニ就キ記載シ、其ノ囊腫ノ上皮ハ壁中深ク窩孔ヲナシテ分枝侵入シ、時ニ絨毛様構造ヲ呈スル事アリト云ヘリ。且ツ壁中ニハ淋巴濾胞或ハ軟骨等ヲ見ル事多シト云ヒ、其ノ一例ヲ圖譜トシテ著書ニ挿入セリ。

又畸形囊腫中ニ顫毛上皮囊腫ヲ含ミ、且ツ其ノ上皮ノ絨毛様増殖ヲナス事アリ。而シテ斯卡ル畸形腫ノ喉頭ニモ發生シ得ル事ハ多クノ成書ニ記載セラル。

以上ノ諸例ヲ見ルニ凡テ一部或ハ全面ニ顫毛圓柱上皮ヲ有スルト雖モ、茲ニ報告セル例ノ如ク絨毛様構造ヲ示スハ一例モ無く、Borst ガ上皮ノ壁中窩孔ヲナシテ侵入セル一例ヲ報告シ、時ニ絨毛様構造ヲナス事アリト云ヘルノミ。而シテ彼ノ例ハ壁中淋巴濾胞ノ異常組織ヲ見タレドモ本例ニ於テハ斯ル異常組織ヲ缺ク。

Louns ハ喉頭囊腫ヲ(一)滯溜囊腫、(二)腔腸性囊腫、(三)淋巴囊腫及ビ血囊腫ニ分類セリ。Glas ハ更ニ一項ヲ加ヘ(一)滯溜囊腫、(二)先天性囊腫或ハ腔腸性囊腫、(三)外傷性囊腫、(四)淋巴囊腫及ビ血囊腫ノ四種ニ分類セリ。入山氏ハ囊腫ノ内容ガ「アテローム」狀ヲ呈スルヲ總括シテ「アテローム」様囊腫ト稱スベキ事ヲ提案セリ。

本例ハ其ノ組織學的所見ヨリシテ Glas ノ分類中、(三)(四)即チ外傷性囊腫、淋巴囊腫及ビ血囊腫、或ハ「アテローム」様囊腫ナラザル事

ハ明カニシテ、本例ハ瀦溜囊腫或ハ先天性囊腫ノ何レカニ屬スベキモノナリ。

Salmon ハ Louns ニ倣ヒ喉頭囊腫ヲ識別スル標識トシテ、位置、形狀、内面上皮ノ性狀、壁中異常組織ノ四項ヲ舉ゲタリ。勿論其等ハ必シモ確定的ノモノナラザル事ヲ注意セルガ、其等ヲ標識トスルハ囊腫研究上甚ダ好都合ナル故ニ余モ亦其ニ倣テ本例ヲ研究セントス。

一、位置。咽頭及ビ喉頭ハ其ノ粘膜炎中至ル所ニ多數ノ粘液腺或ハ漿液腺ヲ藏スルモノニシテ、其等腺ノ存スル所何レノ部ニモ瀦溜囊腫ヲ發生シ得ルハ明カナリ。然レドモ先天性囊腫ハ胎生學上略々一定セル位置ヲ有スルモノニシテ、喉頭附近ニ生ズルモノトシテハ特ニ彼ノ頸部正中線囊腫及ビ側部囊腫ハ定型的ノモノナリ。正中線囊腫ハ胎生時盲孔ト甲狀腺體トヲ結合スル舌甲狀腺管ノ殘胎ヨリ發生スルモノニシテ、必然盲孔ト舌骨間ノ舌筋内中略々正中線ニ在リ。側部頸囊腫ハ主ニ第二、第三腮溝ヨリ發生シ、時ニ正中線ニ迷入スル事アリト雖モ常ニ側部胸鎖乳頭筋ノ下組織中ニ存スト云フ。而シテ胎生學的研究ニヨレバ喉頭及ビ氣管ハ咽喉腸ノ嚢入ニヨリ生ズルモノナレドモ、會厭軟骨及ビ甲狀腺ハ腮溝ヨリ發生スト云フ。即チ會厭軟骨ニモ腮溝ノ殘胎ニヨル囊腫ヲ發生シ得ル事ガ考ヘラル。併シ斯ル先天性囊腫ト雖モ喉頭ハ甚ダ複雑ナル機轉ヲ以テ形成サル、故ニ、其ノ間迷入セル胚芽ハ豫期セザル位置ニ囊腫ヲ發生シ得ル事モ亦當然ナリ。茲ニ報告セル例ハ左側舌會厭窩ノ略々中央ヨリ發生ス。瀦溜囊腫及ビ先天性囊腫ノ好發部位タルヤ言フ須ヒズ。

二、形狀。形狀ハ先天性ノモノハ不規則、長味ヲ有スル事多ク、瀦溜囊腫ハ球形ノモノ多シト云フ。而シテ後者ハ有柄ノモノ多ク、前者ハ廣底ヲ以テ附着スル事多シト云フ。之レ瀦溜囊腫ハ粘膜炎中或ハ粘膜炎下ノ比較的淺在ノ腺或ハ腺管ノ閉塞瀦溜ニヨル受動的擴大ニシテ、先天性囊腫ハ比較的ヨリ深部ニ發生シ、然モ囊腫壁自身ガ不規則ナル能動的成長性ヲ有スルニヨル。本例ニ於テハ外觀狀ハ球形、廣短ナレドモ有柄ナル故ニ瀦溜囊腫ニ一致スト雖モ、之ヲ以テ直チニ瀦溜囊腫ト斷定スルハ早計ナルベシ。

三、内壁上皮ノ性狀。囊腫ノ内壁ヲ形成スル上皮ハ甚ダ興味深ク且ツ重要ナルモノニシテ、頤毛圓柱上皮、骰子狀上皮、扁平上皮、多層扁平上皮等種々アリ。然レドモ斯ル上皮ハ順次移行シ得ル事ヲ考フレバ上皮ノ種類ニヨリ囊腫ヲ判定スル事ハ容易ナラズ。トハ云ヘ本例ノ如ク喉頭ニ於ケル頤毛圓柱上皮囊腫ノ發生ニ就テハ次ノ如キ三ノ條項考ヘラル。

一、舌甲狀腺管ノ殘胎ヨリ發生セルモノ。

二、腮溝ノ殘胎ヨリ發生セルモノ。

三、頤毛圓柱上皮ニ被ハレタル腺排泄管或ハ粘膜凹陷部ノ閉塞擴張ニヨリ發生セルモノ。

舌甲狀腺管ヨリ發生スル囊腫ハ前述ノ如ク盲孔ト舌骨間ニ存スル故ニ本例ニ於テハ其ノ位置的關係ヨリ容易ニ除外シ得ベシ。二或ハ三ノ何

レニ屬スルヤニ就テハ尙研究ノ餘地アリ。茲ニ報告セル頸毛圓柱上皮嚢腫ニ特異ナルハ其ノ内壁ヲ被フ上皮ノ狀態ニシテ、其ヲ再述セシニ天蓋部ハ内面比較的滑澤ナルモ其ノ底部ニ移行スルヤ甚シク不規則トナリテ瘤狀或ハ半島狀ニ腔中ニ突出シ、或ル一部ニ於テハ恰モ腸絨毛ヲ見ルガ如キ感アラシム。又天蓋部ノ處々ニ甚ダ多層ニ發育スル圓柱上皮層ヲ認ムル事ナリ。共ニ上皮細胞ノ能動的發育ヲ示セルモノト思惟サル、所ニシテ、前者ハ平面的ニ、後者ハ立體的ニ生長セルモノト考フルヲ得ベシ。

一般ニ細胞ハ幼若型ナル程發育生長ガ甚ダ旺盛ナルハ周知ノ事ニシテ、Tobiasハ腮溝ヨリ發生セル嚢腫ノ上皮ハ強く能動的發育ヲ營ミ、壁中窩孔ヲナシテ侵入シ、時ニ絨毛樣狀ヲナス事ヲ記載シ、Toloy'sモ亦腮溝ヨリ發生セルモノハ絨毛狀上皮ヲ示ス事ヲ記載セリ。即チ本例モ絨毛樣ノ發育ヲ呈スルハ腮溝ヨリ發生セルモノニ一致ス。

併シ上皮ハヨク或ル條件ノ下ニ惡性變化ヲ起シテ増殖發育スル事アルヲ知レルガ、本例モ普通ノ滯溜嚢腫ガ或ル條件ノ下ニ其ノ上皮ガ斯ル絨毛樣増殖ヲナセルモノカ、或ハ或ル條件ト云フ中ニ腔腸性ト云フ條件ヲ有シテ發育増殖セルモノガ次ニ述ブル如キ異常組織ヲ缺ケルモノカ、余ハ其ノ何レナルカヲ斷言スルヲ得ザレドモ、腮溝ヨリ發生シ得ル位置ニアル事竝ニ上皮ノ性狀ガ腮溝ヨリ發生セルモノニ一致スル事ヨリシテ、滯溜嚢腫トセンヨリ寧ロ腮溝ノ殘胎ヨリ發生セルモノトスルガ無理ナカラント思惟ス。

四、嚢壁中ノ異常組織 腮溝ヨリ發生セル嚢腫ノ壁中ニハ軟骨、骨、腺、筋肉、淋巴濾胞等ノ異常組織ヲ發見スル事屢々ナリト云フ。而シテ此等ハ其ノ嚢腫ノ腮溝ヨリ由來スルヲ決定スル最モ確實ナル標識ナリ。Gibsonハ斯ル異常組織ヲ除キテハ其ノ腔腸性嚢腫ナルヲ證スル何者モナシト迄極言セリ。本例ハ何等スル異常組織ヲ發見スル能ハズ。然レドモ陰性ハ必ズシモ否定ナラザル事ヲ考フル時ハ、腮溝ヨリ發生スルモノト雖モ全く異常組織ヲ缺クヲ得ン。

總 括

- 一、本例ハ四十八歳ノ婦人ノ左側舌會厭窩ノ略々中央ヨリ發生セル球形、櫻桃大ノ嚢腫ナリ。
- 二、本例ハ組織學的ニハ内壁ハ一般ニ一二層ノ頸毛圓柱上皮ニ被ハレタル頸毛圓柱上皮嚢腫ナリ。
- 三、本例ハ鏡檢上天蓋部ト底部ト二部ニ分ツヲ得、天蓋部ノ處々ニ五—一〇列ノ甚ダ多層ニ發育セル頸毛圓柱上皮ヲ認ム。
- 四、底部ノ上皮ハ甚ダ不規則トナリテ瘤狀或ハ半島狀ニ腔中ニ突出シ、或ル一部ハ腸絨毛狀ヲ呈ス。
- 五、本例ハ壁中骨、軟骨、腺、淋巴濾胞等ノ異常組織ヲ缺ク。
- 六、本例ハ内壁ノ性狀ヨリシテ腮溝ノ殘胎ヨリ發生セル先天性ノ頸毛圓柱上皮嚢腫ト思惟ス。

附、會厭軟骨舌面ニ潑溜囊腫ノ最モ頻發スル理由ニ就テ

喉頭囊腫ノ發生部位ハ會厭軟骨最上位ヲ占ム。

Schwartz ハ文獻ヨリ集メ得タル喉頭囊腫百三十八例中會厭軟骨ニ發生セルモノ六十一例ナリキ。Moure ハ百十七例中會厭軟骨五十例、聲帶四十五例、モルガニー氏竇八例、披裂軟骨四例、披裂會厭軟骨三例、假聲帶二例、サントリン氏軟骨部一例及び喉頭ニ無關係ノ部位ニ四例ナリシト。Ulrich ハ喉頭囊腫百二十六例ヲ集メタリシニ會厭軟骨ニ發生セルモノ六十例、聲帶五十例、モルガニー氏竇八例、披裂軟骨及び披裂會厭軟骨八例ナリシト云フ。Feschlerner ハ四十五例ノ喉頭囊腫中十四例ハ會厭軟骨ニ發生セルモノナリキ。即チ喉頭囊腫ノ會厭軟骨ニ來ルハ Schwartz ノ統計ニ依ンバ四四%、Moure ハ四三%、Ulrich ハ四八%、Feschlerner ハ三三%ナリ。

Mischkin ハ七十六例ノ會厭軟骨ニ發生セル囊腫ヲ其ノ發生面ニヨリ分類セルニ會厭軟骨舌面四十九例(六四%)、喉頭面十例、邊緣十七例ナリキ。

上記統計的觀察ヲ見ルニ喉頭囊腫ノ大部分ハ會厭軟骨ニ發生シ、其ノ大半以上ハ會厭軟骨舌面ニ來ルヲ知ル。而シテ會厭軟骨舌面ニ來ル囊腫ノ種類ニ就テハ明ナル統計無キモ、腺或ハ腺排泄管ノ閉塞潑溜ニヨル潑溜囊腫ノ最モ多キハ諸家ノ認ムル所ナリ。

喉頭ニ於ケル潑溜囊腫ノ生成ニ就テハ種々ノ機轉有ル可キモ、一千八百九十八年 Juraas が Heymann ノ參考書ニ炎症性ト非炎症性原因ヲ記載シテ以來一般ノ承認スル所トナレリ。今其ヲ詳述センニ次ノ如シ。

一、炎症性。喉頭潑溜囊腫が急性或ハ慢性ノ喉頭炎ニ續發スルハ臨牀上確實ナル事實ニシテ、潑溜囊腫ノ患者ハ急性或ハ慢性、輕症或ハ重症ノ喉頭炎又ハ喉頭咽頭炎ノ經過中、又ハ已ニ經過セルヲ證明セザル事無シ。即チ炎症ノ結果粘液排泄腺ノ周圍組織ニ於ケル圓形細胞浸潤或ハ漿液滲出ノ爲メ組織ノ膨隆ヲ來シテ腺管ヲ周圍ヨリ壓迫スルカ、或ハ炎症經過ノ後結締組織發育及び其ノ萎縮ノ爲メニ腺口ヲ絞塞スルカニヨリテ排泄管ノ狹塞又ハ閉塞ヲ來シテ潑溜囊腫ヲ形成スルニ至ル。又排泄管上皮已ニ膨張、或ハ脫落上皮ノ腺管介在ニヨリ其ノ管口ヲ狹塞、閉塞セシメテ囊腫ヲ發生ス。更ニ又分泌粘液ノ性質變化シテ其ノ粘着度ヲ増ス時ハ其ガ狹塞部ニ潑溜シテ排泄管ヲ擴張シ、遂ニ潑溜囊腫ヲ將來シ得ベキ事モ首肯シ得ベシ。

二、非炎症性。炎症結果ニアラズシテ或ル動機ニヨリ腺口閉塞セラレ、爲メニ腺管擴張シテ囊狀變形ヲ來ス場合ナリ。

Juraas ハ全ク炎症症狀無クシテ會厭軟骨舌面ニ屢々潑溜囊腫ノ發生スルヲ見テ、潑溜囊腫ノ生成ニ就キ前述ノ炎症以外ニ或ル他ノ動機ノ有ル可キヲ信ジ、次ノ如キ假說ヲ提出セリ。即チ會厭軟骨舌面ハ食物ノ嚥下ノ際、殊ニ強力ナル喉頭筋ノ壓力ヲ以テ食物ト相接觸スル故ニ、

或ル好都合ナル機會ニハ丁度扁桃腺ノ腺窩ニ於ケル如ク、食物ノ微細片ガ腺口内ニ壓入セラレテ腺口部ヲ機械的ニ閉塞シ、因ツテ溜溜囊腫ヲ形成スルモ可能ナラント。

何故ニ會厭軟骨舌面ニ囊腫特ニ溜溜囊腫ガ最も頻發スルカノ問題ニ就テハ、單ニ會厭軟骨舌面ハ最も刺戟ヲ受ケ易キ位置ナルガ爲メ炎症ノ最も屢々起ル故ナリト云フ以外ニ、Juraszガ機械的介在説ヲ唱ヘタルノミ。而シテ特ニ其ノ動機ヲ論ゼン者無キガ如ク思ハルハ余ノ寡聞ナルカ甚ダ奇異ニ感ズル所ナリ。

余ハ前記ノ會厭軟骨ニ發生セル顫毛圓柱上皮囊腫ニ就キ研究中、偶々得タル喉頭粘膜炎及ビ粘液腺ノ解剖的智識ガ會厭軟骨舌面ニ溜溜囊腫ノ最も頻發スル理由ヲ説明スルニ最も好都合ト信ゼラレタル故ニ、茲ニ卑見ヲ陳述シ以テ諸賢ノ批判ヲ仰ガントス。

余ノ解剖學的説明

喉頭ニ於ケル腺ハ粘液及ビ漿液ノ混合腺ニシテ、聲帶縁ノ僅少ナル區域ヲ除キテハ到ル所甚ダ多數ニ存在シ、大略次ノ三群ニ分類スルヲ得。

一、前喉頭腺群。gland. lar. anteriores.

二、中喉頭腺群。gland. lar. mediae.

三、後喉頭腺群。gland. lar. posteriores.

會厭軟骨舌面ノ溜溜囊腫形成ニ關係アルハ前喉頭腺群ニシテ、會厭軟骨ノ喉頭面、軟骨間隙、舌面ニ存スル腺群ヲ稱ス。其ノ腺ニ關シ種々ノ著書ニ詳記サレテアレド、最も代表的ノDonker-Kalderノ參考書ニ記載サレタル一章節ヲ借りレバ、

『會厭軟骨ニ於ケル腺ハ其ノ遊離部殊ニ其ノ喉頭面及ビ軟骨孔窩中ニ存シ、且ツ舌面ニ於テハ基底部附近ニ多數存在ス。而シテ舌面ニ於ケル腺ハ通常其ノ排泄管ヲ軟骨間隙ヲ通ジテ喉頭面ニ送り、例外的ニ舌面ニ開口スルノミ』ト。即チ會厭軟骨舌面ニ存スル腺ガ其ノ排泄口ヲ遙ニ隔リタル喉頭面ニ有スルガ甚ダ興味深キ事ナリ。

會厭軟骨舌面ニ溜溜囊腫ノ多數發生スルニ就テ、Juraszガ前述ノ如ク會厭軟骨舌面ハ嚥下ノ際特ニ強キ壓力ヲ受ケ、食物ノ微細片ガ舌面ニ開口スル排泄管ニ壓入サレテ囊腫ヲ發生シ得ル事アラント云ヘルモ、事實解剖的ニハ會厭軟骨舌面ハ殆ド排泄口ヲ有スル事無ク、唯例外的ニ開口スル腺排泄管ノ機械的閉塞ニテハ特ニ溜溜囊腫ノ舌面ニ多キヲ首肯シ難シ。

併シ熟考スルニ其ノ事實コソ却ツテ説明ニ好都合ナルモノニシテ、舌面ニ於ケル腺ガ舌面ニ開口セズ喉頭面ニ開口スル特ニ細長ナル排泄管

ヲ有スルヲ考フレバ、排泄管ハ長キ其ノ經過中炎症變化ニ遭遇スル機會ノヨリ多ク、因ツテ瀦溜囊腫ノ最モ發生シ易キヲ容易ニ推察スルヲ得ベシ。

次ニ又會厭軟骨ノ喉頭面及び其ノ他喉頭内ノ粘膜ハ鬆粗ナル結締織ニ乏シク軟骨面ニ比較的密接ニ附着セルニ反シ、會厭軟骨舌面及び舌根部、舌會厭皺襞ハ粘膜下結締織甚ダ鬆粗ニシテ、粘膜ト軟骨間ノ關係割合ニ緩疎ナリ。即チ舌面ニ生成セシ瀦溜囊腫ノ其ノ他ノ面ニ生ゼシ其ヨリヨリ大ニ發育シ易キ事モ與ツテカアル事ト思惟ス。

Literatur.

- 1) **Luschka**: Ueber Kolloideysten d. Kehlkopfes. *Virchow's Archiv*, Bd. 52. 2) **Gruber**: Cystis retentionis prae epiglottica. *Virchow's Archiv*, 1876. Bd. 63. P. 98. 3) **Heschlorn**: Ueber Epiglottiscysten. *B. K. W.* 1877. P. 620. 4) **Jurasz**: Zur Lehre von den Kehlkopfcysten. *D. M. W.* 1884. P. 623. 5) **Jurasz**: Neubildungen des Kehlkopfes. Die Krankheiten der oberen Luftwege. 1882. 6) **Jonsse**: Cystische Tumore an der Basis der Epiglottis. *C. f. L. u. R.* 1897. Bd. 13. 7) **Schmidt**: Cysten in den Kehlkopf. Die Krankheiten der oberen Luftwege. 8) **Jurasz**: Neubildungen des Kehlkopfes. *Heymann's Handb.* 1898. 9) **Swietzysky**: Ein Beitrag zur pathologischen Anatomie d. Kehlkopfpolypen. *A. f. L.* 1898. Bd. 7. 10) **Baron**: Cyste d. Epiglottis. *C. f. L. u. R.* 1869. Bd. 15. P. 167. 11) **Winkrav**: Epiglottiscyste. *C. f. L. u. R.* 1899. Bd. 15. P. 208. 12) **金形英五郎**: 喉頭菜腫ノ二例. 會報. 六卷. 13) **黒岩福三郎**: 喉頭良性腫瘍ノ二三實錄ニ就テ. 會報. 八卷. 14) **Borst**: Cystische Geschwülste. Die Lehre von der Geschwülste. 2. Bd. 1902. P. 838. 15) **Senator**: Ein Fall von cystischen Tumoren d. Epiglottis. *D. M. W.* 1902. 16) **岡田和一郎**: 珍奇ナル喉頭ノ良性腫瘍ニ就テ. 會報. 九卷. 17) **岡田和一郎**: 珍奇ナル喉頭ノ良性腫瘍ニ就テ. 醫事新聞. 明治三十六年. 18) **Baumgarten**: Zur Genese d. Epiglottiscyste. *A. f. L.* 1905. Bd. 17. 19) **Chiari**: Die Cyste. Krankheiten der oberen Luftwege. 1905. P. 350. 20) **Kahler**: Ein Beitrag zur Genese der Epiglottiscysten. *A. f. L.* 1905. P. 8. 21) **Gras**: Ueber Larynxcysten. *A. f. L.* 1907. Bd. 19. P. 235. 22) **Horne**: Cystoma of the Epiglottis. *J. of O.* 1907. Vol. 22. 23) **村山政之助**: 巨大ナル喉頭ノ良性腫瘍ニ就テ. 會報. 十三卷. 24) **Reck**: Cyst of Epiglottis. *Laryngoscope*. 1909. Vol. 19. 25) **Aschoff**: Hamartome und Choristome. *Lehrbuch I* Bd. 1911. P. 751. 26) **Schneider**: Zur Genese der kongenitalen Larynxcysten. *Z. f. O.* 1912. Bd. 64. 27) **Mischkin**: Ueber Epiglottiscysten im Anschluss an einen Fall. *C. f. L.* 1913. 28) **Alexandrine**: 人類會厭軟骨結膜ノ微細構造. 會報. 十九卷. 29) **Chiari**: Zystengeschwülste. *Chirurgie des Kehlkopfes*. 1916. P. 363. 30) **久保潜之吉**: 舌根囊腫. 會報. 二十三卷. 31) **Goldstein**: A. case of laryngo-epiglottidean cyst. *Annals of O.* 1917. 32) **赤松純一**: 本邦人ニ於ケル甲状腺殘胎ノ研究. 附. 之ヨリ發生スル腫瘍及び瘻管ニ就テ. 會報. 二十四卷. 33) **Dean and Gregg**: An Implantations cyst of the Larynx. *Annals of O.* 1918. P. 1037. 36) **Hubrich**: Cyst der Epiglottis. *D. M. W.* 1922. P. 268. 37) **Kretz**: Handbuch. IV. Bd. 1922. P. 518. 38) **黃玉階**: 會厭チヌス「」ノ一例. 臺灣醫學會雜誌. 大正十年. 1922號. 39) **田上一忠**: 會厭軟骨チ

4) 據「チヌチ」ニ就テ、會報、三十一卷、42) 久保猪之吉：巨大ナル會厭軟骨嚢腫ノ手術法、會報、三十二卷、43) Goldmann：Kehlkopfpolyp.
 M. f. O. 1925. P. 739. 44) Mason：Laryngeal Cysts. Annals of O. 1926. Vol. 35. P. 873. 45) Wustein und Küttner：Epithelial
 Cyste. Lehrbuch. Bd. 1. 46) Denker und Kahler：Dysont neische Larynxysten. 2 Bd. P. 428. Histologie des Schlundkopfes. P.
 364. Bd. 1. Driese des Kehlkopfes. P. 387. Bd. 2. Handbuch. 1926.

附 圖 說 明

- 第一圖　嚢腫ノ喉頭鏡所見
 第二圖　組織標本（弱擴大）
 第三圖　同　　（強擴大）

Fig. 2.

Fig. 3.

Fig. 1.

T. Mitsuyoshi: Über die mit glimmerndem Zylinderepithel bekleidete Zyste an der Epiglottis und den Grund des häufigen Vorkommens der Retentionszysten an der lingualen Fläche der Epiglottis